

第1章 保全すべき草原の評価に関する検討

1 1 作業計画

(1) 保全すべき草原に関わる3つの視点

阿蘇の草原は、古くは奈良時代から牛馬の生産の場等として利用され、その結果として地域に暮らす人たちの手で雄大な草原景観が維持管理されてきた歴史的・自然的遺産といえる。この草原景観は阿蘇に暮らす人々にとって、先祖代々受け継がれてきた誇りやアイデンティティーの源となっており、そうした人と自然との関わりの中で生まれ、維持管理されてきた雄大な草原景観と世界最大級のカルデラ地形が高く評価され、国立公園にも指定されている。

しかし近年、化学肥料の導入や作業の機械化による農業形態の変化と、それに伴う採草の需要の減少や、畜産業の低迷や畜産農家の高齢化などと共に、草原を維持することが困難になりつつある。この結果、地域の人々の誇りでもある雄大な草原景観や貴重な生物の生育生息環境が危機に瀕しており、早急な保全対策が求められている。

今回、阿蘇の草原保全を検討するに当たり、次の3つの視点に着目した。

1) 景観保全

辺り一面に咲くユウスゲや、牛・馬がのんびりと草をはむ様子など、季節毎に様々な姿を見せる草原景観は阿蘇に暮らす人々が先祖代々生活と共に維持してきたものであり、住民にとっての原風景でもある。

一方、世界最大級のカルデラ地形と雄大な草原景観により国立公園に指定され、今では毎年多くの観光客が訪れ、観光は地域の重要な産業の一つとなっている。

そのため、地元の人達にとって重要な景観地域、観光客等に好まれる代表的な阿蘇の景観地域の双方を把握し守ることが、阿蘇の魅力を維持していくことにつながると考える。

2) 希少種保護

阿蘇の草原には、その利用形態や変化に富む地形から多様な草原性植物が生育している。その中には、九州が大陸と陸続きであった時代に南下して冷涼な阿蘇の草原に残った、大陸系遺存植物が多く含まれ、草原の植物相を特徴づけているが、そのほとんどは草原の減少により生育が危ぶまれている。絶滅危惧種や危急種も多く、これらの種の絶滅を防ぐためにも生育環境を維持することが重要である。

3) 草原と住民との関わり

阿蘇の草原は地域に暮らす人々の生活の中で放牧地や採草地として利用されたほか、お盆の時期には草原の野の花を仏様やお墓に供える「盆花とり」という文化・慣習を生み出してきた。これは阿蘇の人々の暮らしが草原とともにあり、その中で野草を身近に感じ、生活に取り入れていた象徴的事例であり、阿蘇ならではの風物詩でもある。

草原の保全を考えるにあたり、地元の方々に身近に感じられる、わかりやすい視点を取り入れ評価する必要があることや、盆花に代表される草原性植物は管理された採草地に多く見られることから、「盆花とり」という草原文化を評価・保全することは、その背景にある草原植物種の多様性や草原景観の保全にもつながると考える。

(2) 作業概要

上記を踏まえ、本章では、下記の3点について作業を行った。

1) 阿蘇の草原の現状把握

阿蘇の草原は農業や畜産による維持管理の形態から、いくつかの質の異なる草原タイプで構成されている。草原景観の保全や希少種の保護を検討するには、草原タイプとその維持管理方法を明確にし、これに基づいて草原の分布状況や変化状況等の現状を把握することが前提となる。

2) 阿蘇の草原と住民の関わり方の把握

阿蘇の人々と草原の関わりから生まれた文化を「盆花とり」の慣習を例に、その存続状況や草原に対する住民の意識を把握する。また、「盆花とり」の慣習が変化した要因を阿蘇の草原を取り巻く社会状況の変化と照らし合わせることにより、その背景にある阿蘇の草原景観の変化や、草原性植物の多様性の減少をもたらした要因についても考察した。

3) 保全上重要な草原の抽出

草原景観保全、希少種保護の2つの観点から、国立公園内とその周辺（阿蘇郡内）における保全すべき草原の場所を抽出した。これを牧野組合による草原の維持管理状況と合わせて考察することにより、草原景観保全および希少種保護上緊急性の高い地域を抽出し、草原の保全に向けた提言を行った。

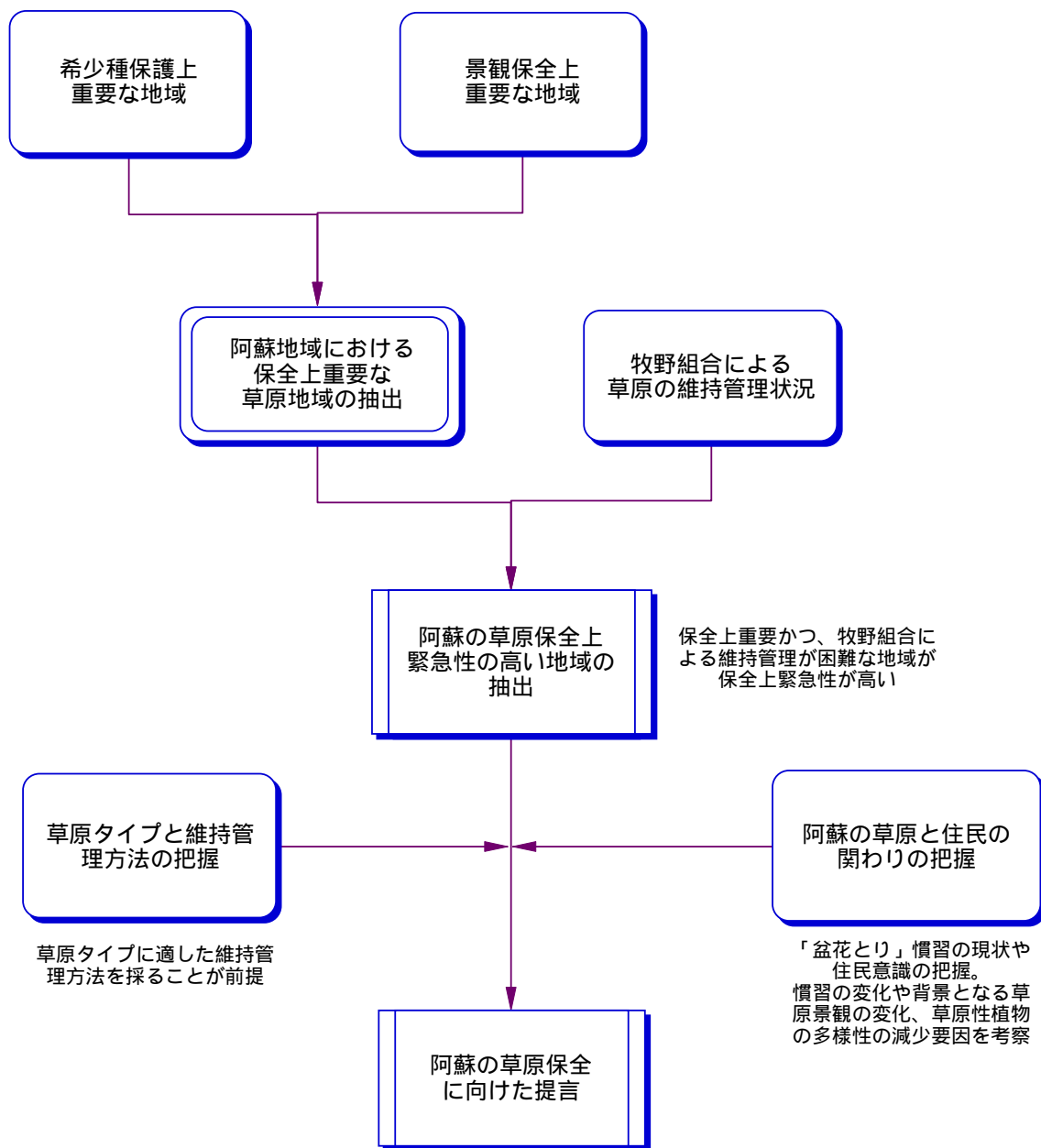


図1 1 保全すべき草原の評価作業フロー